

## 8.岩塩坑について

まず、全ヨーロッパでの現在の塩の統計を示しておく、

- ・ヨーロッパ(欧州 33 カ国)での塩の生産数量は、世界の塩生産数量の約 20%(2009 年、約 5,340 万/約 2 億 5,680 万)、生産量は需要量を賅っている。このため、塩の市場は安定している。
- ・ヨーロッパの塩の生産方法は、岩塩、かん水、天日塩である。製造量の変動は少なく、供給は安定している。

ヨーロッパでは、紀元前から岩塩の採掘が行われており、アルプスの周辺のドイツ・オーストリア(有名なのは、ハルシュタット)では、岩塩採掘跡が保存されている。

以下今回訪問した岩塩坑について、その概要を述べる。

### (1)ハライン岩塩坑(オーストリア・ザルツブルグ)

作曲家のモーツァルトの生誕の地としても有名なオーストリアのザルツブルグ(右の写真ザルツブルグの街並)は、岩塩からあがる利益で数多くの壮大な建物が建てられ、現在その歴史的建造物と旧市街がユネスコ世界遺産に登録されている。

市内を流れるザルツァッハ川沿いに車で 20Km ほど遡るとハラインの街に着く。さらにそこからドイツ国境方面への山を登っていくとハライン岩塩坑跡(デュルンベルクという地名)の建物群が見えてくる。(2 月に訪問したので雪景色、右の写真)



現在、この岩塩坑跡は、容易に見学できるようになっていて、地下の採掘跡を歩いて見て回ることができる。(何と 1607 年に最初の見学者があったと記録されている)坑道の総延長は、約 65Km、見て回ることができる坑道の長さは約 12 Km に及ぶ。

採掘方法(生産方法)は、岩塩とかん水であり、産出された塩は、ハラインで製塩され、ザルツァッハ川を船で下りヨーロッパ各地に送られていた。(なお、1871 年には、貨車輸送に切り替えられている)

生産数量としては、1600 年頃ザルツブルグの大司教であったライテナウが湿式採掘法を奨励してから飛躍的に生産量が増加したとのことであるが、年間の最高生産量を記録したのは、1971 年の年間 72,230 t である。(右の写真は岩塩坑の模式図)

その後は、採算がとれなくなり、紀元前から採



掘られていたというハライン岩塩坑は、1989年に閉鎖された。

(ハライン岩塩坑のHPによると、800年にわたるデュルンベルクの岩塩坑の歴史のなかで、総量1,200万トンの塩が生産されたとのこと)

塩は、人間の生命維持に欠くことができないナトリウムを多く含んでいる。人間は、体液のナトリウム濃度を維持するために、汗や排泄で失われたナトリウムを常に補充しなければ生きていくことができない。

紀元前よりはるか昔の狩猟・採集時代には、動物や魚の肉を大量に食べていれば、塩を特別に摂取する必要はなかったという。その後人口が増え、穀物を摂取するようになると、意識的に塩の摂取が必要となる。一方、塩を生産するのは、一部地域を除いては困難なことであり、塩は大変高価なものとなった。



塩は、栄養素としてまた基本的味付けの材料として重要な役割を果たしたが、ヨーロッパでは食品の腐敗防止にも大量に使われた。

中世以降、人間の生活の必需品である塩の需要は膨大のものとなり、また生産地が限定されていたから、権力者(貴重な財源として)や商人(金と同価値の商品として)は塩を支配しようとした。

このような塩の生理的役割、物質としての貴重性を背景に、ザルツブルグの都市としての成り立ちの訳が解き明かされると同時にハライン岩塩坑がこれほど長く生産を続けることができたか理解できると思う。

最後に、ザルツブルグの歴史における塩との関わりについてのエピソードを述べておく。

ザルツブルグは、696年にルーベント司教が司教区の長となり、それ以来1803年のナポレオンのフランス軍の支配に至るまで、司教が領主権を持つ司教区直轄領として繁栄してきた。

初代司教に就任したルーベント司教は、バイエルン公よりライヒェンハルの20か所の塩水井戸の権利を贈られ、布教の財源としていたというし、セントピータ修道院も建設したという。

ザルツブルグの司教は、ハラインで製塩されザルツァッハ川を通じてヨーロッパ各地に積み出される塩の積載量に応じて税を徴収して財源にしていた。そのため、歴代司教は豊かな財源を持ち歴史的にも優れた建造物を次々に造ることができた。前述のライテナウ司教は、塩の生産を大いに奨励してハライン岩塩坑の拡大に寄与したという。(上の写真はザ

ルツブルグの街並、遠くにホーエンザルツブルク城)

ザルツブルクが「塩の街」と言われるのも、このような塩と街の発展の関わりを考えればもっとものことと言えよう。

## (2) ヴィエリチカ岩塩坑(ポーランド・ヴィエリチカ)

ポーランドの古都クラクフ市から南に 20Km 行くと、世界遺産に指定されているヴィエリチカ岩塩坑がある。(下の写真はクラクフの中央広場と織物取引所)



ここの岩塩坑については、多くの先人達の文献があるので、重複を避ける意味でも簡単に岩塩坑の特徴について述べることにする。

ヴィエリチカ岩塩坑は、13 世紀から 1996 年に採掘中止になるまで 700 年以上にわたって岩塩を産出してきた。その坑道の総延長は、300Km もあり、地下 300m まで 9 層にわたって採掘され、採掘跡には 2000 以上の部屋がある。

岩塩の採掘作業には、メタンガスの爆発や地下水などの危険が付きものであったので、坑夫たちは安全を祈り、神や聖人、英雄たちの像を彫刻していったとのことである。(礼拝堂が 20 か所ある)

主な部屋(=採掘跡)は、次の通り。

### ・コペルニクスの部屋

1493 年、コペルニクスがヤギェウオ(クラクフにある大学)大学生の頃訪問。

### ・聖アントニ礼拝堂

坑内最古の礼拝堂、1698 年より毎朝仕事前の安全を祈る礼拝が行われていた。

### ・18 世紀の木造エレベーター(再建)

8 頭の馬が 2 トンの塩を下層から引き揚げていた(要は 8 馬力のモーター)。

### ・聖キング礼拝堂

1963 年に完成した最も美しい礼拝堂、多くの彫刻が施されている(キング姫伝説～ヴィエリチカ岩塩を発見したとの伝説があるハンガリーの王女)。

### ・バロンチの部屋

32%飽和状態の塩湖がある。

### ・ワルシャワの部屋

54m×17m、高さ 9m の大ホール、会議、パーティー会場として使用されている。

・ ヴィスワの部屋

売店、案内書、クロークとして使用されている。

岩塩坑の標準的な見学時間は、2～3 時間かかり、博物館まで見るともう 1 時間多くかかる。それでも、地下 100m まで潜り、全体の坑道の 2～3%を歩いたにすぎないとのこと。

ヴィエリチカ岩塩坑と歴史、経済的な関わりは、今回の訪問で明確にわからなかったが、13 世紀以降、「金と塩は同価値であった」「国家財政の 1/3 は塩の収入であった」と言われている。(地下の博物館には、中世の塩の輸送手段たとえば馬車・船の模型、ヴィエリチカからヨーロッパ各地への流通経路図、岩塩採掘のための道具などが展示してあったが、詳細なデータはとれず)

採掘作業用エレベーターで地下 100m から一気に地上へ戻ってきたときは、すでに夕暮れ時であった。(右の写真は夕暮れのヴィエリチカ岩塩坑の建物)

